**沖縄で考えたこと**

　　　　　　　　　　　　　　　～戦争を押し返す福祉の力～

薗田碩哉

●沖縄に流れる二つの時間

　久方ぶりに訪ねた沖縄の海は美しかった。那覇からバスで東へ向かって海岸に出、安座間港からフェリーで20分ほどの久高島を取り巻く海は、２月の優しい陽光を浴びて輝いていた。磯でダイビングをしていた青年はギリシャ人で、故郷のエーゲ海を思い出すと言っていた。この島は、子どもを産み終えた女たちがノロ（祝女）になって村の祭祀を司る伝統が今に生きていることで、また、島の土地は共有で､16歳になると農地を分け与えられて耕作し、隠居すれば返上して若者に渡すという、原始共産制のような慣習を維持していることでも知られている。御嶽(ｳﾀｷ)と呼ばれる聖地で、鬱蒼とした大木や岩の壁の前に座して静かな時間を過ごすと、遥かなニライカナイからやってきた神々と対話が出来るような気がしてくる。

　この平和な沖縄（面積で言えば国土のわずか0.6％）に、日本にある米軍基地の74％が集中している（あとは三沢基地のある青森に約8%、横須賀や厚木のある神奈川に約5%など）。基地は沖縄県の全面積の10.4％を占め、沖縄本島では実に18.8％に達する。本島中南部の平坦な場所には面積20平方キロ、羽田空港の約2倍の広さを持つ沖縄最大の嘉手納空軍基地がある。そのすぐ南の宜野湾市には普天間飛行場があり、周囲をびっしりと民家が取り囲む中で四六時中軍用機がすさまじい騒音を撒き散らして飛び交い、世界一危険な基地とされる。さすがに政府と米軍は普天間の返還で合意したものの、その代替地はやはり県内中部の辺野古で、ジュゴンの住む海を埋め立てて恒久的な基地建設をもくろんでいる。翁長知事を先頭にオール沖縄で勢いを増す県内移設反対運動に、政府は憲法無視の強権をふるい、是が非でもこれを押し通そうとしているのは周知のとおりだ。

　沖縄には２つの時間が並行して流れている。一つは悠久の古代から綿々とつづくノロの祈りを通奏低音とする平和で静謐な時間である。もう一つはオスプレイの轟音や戦車のキャタピラが大地を踏みしだく破壊音とともに進行する時間だ。後者の猛々しい時間は、今にも前者の平和な時間を飲み込みそうに見えるが、どっこいそう簡単にはいかない。平和な時間は大きく広がって沖縄の全体を包み込み、やがては戦争という狂気を駆逐して、美しい海と大地を回復する希望を心ある人々に与え続けている。

●戦争は福祉を破壊する

　沖縄を訪ねたのは日本福祉文化学会が主催した「戦争と福祉～沖縄を考える」というシンポジウムに参加し、コーディネーターを務めるためだった。社会福祉の研究者として積極的に社会問題への発言を続けた故・一番ヶ瀬康子が中心になって1989年に創設したこの学会は、社会福祉の研究者と実践家がともに参加する運動体として、福祉を豊かにする文化の役割に注目し、「福祉の文化化」と「文化の福祉化」を合い言葉に活動してきた（筆者も創設以来のメンバーで現在は顧問を務める）。

福祉という営みは平和が基礎であり、戦争は福祉の対極にある。近年この国が安部政権に主導されて歴史のハイウェイを逆走し「戦争をする国」へ向けてひた走る中、2015年に学会は「福祉を破壊する戦争法の廃止を求める学会声明」を出して、平和を希求する多くの市民団体や大学の研究者の潮流に加わった。2016年にはこの声明を具体化するべく、戦争と平和の問題の最前線ともいえる沖縄で地元の会員とともに新たな企画に取り組み、標記のシンポジウムを2017年2月18日に那覇にある沖縄大学で開催したのである。

　当日は快晴、2月の那覇は夏のあのべったりしたすさまじい暑さとは無縁の春の快適さに満ちていた。ひめゆり通りから東へ１キロほどの沖縄大学は、こじんまりしたキャンパスにコンクリートの地肌を出した、しゃれたデザインの校舎が並ぶ。「戦争と福祉」セミナーの人気は上々で、階段式の大教室は100名を越える参加者で賑やか、内地（ヤマト）から海を越えてやってきた参加者も30人を超えた。

　冒頭、ジャーナリストの山城紀子さんが「戦争と福祉～今なお引きずる沖縄戦と米軍占領～」と題して講演した。山城さんは沖縄タイムスの記者として活躍し、その後フリーのジャーナリストに転じて医療から福祉、ジェンダーの問題などを精力的に追いかけ、岩波の『世界』にも沖縄問題などで健筆をふるっている。幅広い取材をもとに戦争が人々の身体と心に刻み込んだ、今も消えない傷について力をこめて語った。

　６月２３日は凄惨をきわめた沖縄戦が終結した日で、今も沖縄各地で慰霊祭が行われる。沖縄戦での住民の死者は約15万人、県民の４人に１人が死んだ。軍人の死者は9万人、この数字を見ただけでも軍隊は国民を守らない（盾にする）ということが見えてくる。そしてこの日が近づくと今も「チムワサワサー」する＝心が騒ぐ高齢者が少なくないのだそうだ。さらに戦争に続く米軍支配で沖縄の無権利状態は長く続く。沖縄の医療も福祉も低い水準に留め置かれ、日本復帰後の今も例えば住民1人当たりの医師の数は本土の半分以下だという。衝撃を受けたのは「したくかんち」という言葉。はじめは何のことか分からなかったが、漢字を当てると「私宅監置」になる。精神医療が戦後も旧来のままで放置されていた沖縄では、精神障害者を収容する場所がほとんどなく、彼らは自宅に設けられた穴倉のような空間に閉じ込められ、食事を与えられるだけで、排泄物は垂れ流しの惨状だったという。そんな状況が復帰まで続いていた。

復帰前には沖縄の老人ホームはたった4か所しかなかった、盲老人ホームは関係者の熱心な運動にもかかわらずいまだに出来ていない、児童館や母子寮についてはその情報さえ届かず、米軍は本土からの福祉援助を拒否してきた―戦争と軍隊がどれほど反福祉的な存在であるかを山城氏は誰にもわかりやすい形で示すとともに、その状況の中でも希望を失わずに活動を続けてきた人々のことを共感をこめて紹介してくれた。

●戦争と福祉を考えるシンポジウム

　さていよいよシンポジウムが始まる。コーディネーターとしての筆者はこの舞台の演出家という気構えで、まずはご当地沖縄大学の学長である仲地博氏に沖縄の置かれた状況を大局的に語っていただいた。仲地氏はいかにも温厚な紳士で、ゆったりと確信をこめて沖縄の過去から話を始めた。スライドで映し出された珊瑚を散りばめたきらびやかな宝冠を背景に、氏は琉球王国の成立から説き起して、沖縄の自治と自立を語った。15世紀に成立した琉球王朝は中国の冊封を受けながら日本とも関りを持ち、地の利を生かした東アジアの貿易センターとして繁栄した。軍事力に頼らず、通商を土台にした平和国家である。その自立を犯したのが江戸期の薩摩藩であり、それは明治政府の植民地化政策に継承された。沖縄は太平洋戦争では本土の盾にされて焦土と化し、その後は米軍に引き渡されて基地の島になる。まことに踏んだり蹴ったりの歴史だが、沖縄人は翁長知事の言葉にあるように「誇りと尊厳」を手放さず「自己決定権」を求めて戦い続けている。仲地氏は問う、一体国家とは何なのか。憲法の意味は沖縄でこそより鮮明に浮かび上がる、と。

二番手の論者は立教大学教授で児童福祉論や人性学を専門にする浅井春夫氏。仲地氏の指摘を受けて「国家の安泰を優先する」国家観と「国民一人一人のしあわせを土台とする」国家観の相剋から論を進める。近代憲法とは後者の立場から国家を縛るものであるはずだ。氏も１枚のスライドを映し出す。マンションの屋根の上を巨大な飛行機がスレスレにかすめて飛ぶ一瞬を下から見上げて撮った写真だ。飛行機の轟音が鳴り響いてくるような迫力がある。かつて宜野湾市で１年暮らしたことのある浅井氏自らが撮影したものという。これは特別の光景ではなく、まさしく基地の街の日常であり、力の支配の象徴と言える。

浅井氏は沖縄の孤児院を研究して、子どもの死が隠蔽されてきた事実や、戦時の毒ガス製造で知られる瀬戸内海の大久野島での肺がん、肺気腫の多発などの例を引きながら、戦争体制が「福死」の道であることを明快に説かれた。さらに日本政府の沖縄への態度や対応に「いじめ」の図式を見るというユニークな指摘もされた。精神医学者の中井久夫の言葉「いじめは、他人を支配し、言いなりにすることです」は、まさしく今の政府の姿勢にどんぴしゃり当てはまる。本土のわれわれがこの「いじめ」に対して傍観者でいていいのか、というのが浅井氏の突きつける問いである。

　シンポジストとしても参加された山城さんは、先の講演で語る時間がなかった「戦時の性暴力」についてその実態を話された。沖縄には戦争当時､150ヵ所近い「慰安所」が設けられていたという。遊郭にいた女性たちに加えて朝鮮半島から連れて来られた多くの女性が日本軍の兵士に性の奉仕をさせられた。沖縄戦の後も女性にとっては米軍による性暴力の戦争が今に続いている。これまではほとんど「話すことができなかった」被害女性たちがようやく重い口を開いて語り始めが、軍隊や基地が「女子ども」の安心・安全とは相いれないものであることをこれほど明確に示す事実はあるまい。

　この学会の会員でもあり、立教大学で障害者福祉論やノーマライゼーション論を担当する結城俊哉教授は、1950年代の伊江島で米軍による強制接収に住民が激しく抵抗した「島ぐるみ闘争」を描いた演劇『命どぅ宝（ぬちどぅたから＝命こそ宝）』から「剣を持つものは剣で滅ぶ」という言葉を紹介する。とはいえ事態は着々と平和の破壊に向かって進んでいることを、軍事研究の拡大や秘密法の制定（さらには共謀罪）、やまゆり荘事件にみる障害者の差別と排除の発想などを上げて指摘された。「平和が大事」というだけでは足りない、戦争文化を押し戻す「平和の文化」をもっと前に出していかなければならない、と。

●沖縄を受け止めて生きる

　しばらくぶりに見る那覇の国際通りは、内地資本のショッピングセンターやお定まりの土産物店が軒を並べ、沖縄には違いないが何か薄っぺらになった感じがぬぐえない。修学旅行の高校生とアジア系の観光客がゾロゾロ歩いている。米兵はあまり見かけない。観光は今後とも沖縄の生きる道だから、お客さんが増えることはいいことだ。しかし、うわべの沖縄をもう１枚めくって沖縄の根っこのところに目をやると、観光を越えた真摯な課題が浮かび上がる。沖縄の今こそが日本の現実を如実に示している―戦争と平和、国と国の関係、国家と自治体、個人の権利、差別と偏見、女性と子どもと障害者、福祉の意味…。これらのテーマは沖縄というフィールドで捉えてはじめて、その真実を顕わにする。沖縄は日本であり、日本は沖縄なのだ。

　シンポジウムの結論は、沖縄について（すなわち日本について）これからも考え続けなければならないということだ。最後にコーディネーターとして提案した―すべての参加者が今日の議論をそれぞれの現場に持ち帰って周囲の人（家族でも友人でも職場の仲間でも）とともにもう一度語り合ってみること―これが認められなければシンポジウムを閉じない！と脅迫したので、提案は笑いと拍手とともに承認されたが、「沖縄を自分の問題として受け止めること」はウチナンチュー（沖縄人）はもとより、すべてのヤマトンチュー（本土人）に課せられた務めである。